
ドラゴンキングダム・クロニクルズ

竜蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンキングダム・クロニクルズ

【Nコード】

N7416A

【作者名】

竜蒼

【あらすじ】

ある力を秘めた一人の青年と、それを取りまく者達を中心に、回りだす世界の物語

プロローグ

ルクデイム

遙か太古から存在する辺境の都市。レンガ造りの家や歴史的な建物が時代の波に呑み込まれず今も色あせることなく残る。そしてファードイナンスという一人の女王によってその都市は統治されていた。しかしその日、普段美しいはずのルクデイムは漆黒の闇に覆われ所々から煙が上がっていた。

そしてその頃、ルクデイムの王城では兵士達があわてふためいていた。

「ファードイナンス様！ 大変です！ 魔属の反王政派からの奇襲です！ すぐに避難を」

そうなのだ。敵による奇襲。ルクデイムは突然の襲撃によって騎士団が存在しながらも、為すすべがなくなっていた。

「落ち着きなさい」

ファードイナンスと呼ばれた女性は、突然部屋に飛込んできた兵士を制し、かたわらに立つ従者に直ちに避難の準備をするよう指示を出す。そう彼女こそ女王ファードイナンスその人である。背は少し高めで大きな、空をたたえる様な青い瞳。すらっとし血色の良いピンク色の頬。顔立ちはもう美人としかいえないものである。髪は漆黒の黒だがそれがとても似合っていた。

その後ファードイナンスは自らもネグリジエ姿から着替え、普段身に付けている純白の動きやすいドレスを身に付ける。

「さあいきますよ」

落ち着いた物腰で彼女は話す。だが彼女は落ち着いているように一見見えたが心の中は不安と恐怖でいっぱいだった。

「必ずあの人助けにきてくれるわ……私の子は特別だって言っていたもの……」

ファードイナンスは一人悲しそうにつぶやいた。

「さあこちらから避難を」

彼女は従者と護衛の兵士達に案内されるままに隠し通路を進む。

先を急ぐ彼女の腕には赤ん坊が抱かれていた。

そしてやっと通路を抜けると、そこは都市の城壁の外。だが目に入ってきた光景は彼女に絶望をもたらした。

反魔属王政派の軍服を身に付けた人の集団に待ち伏せされていたのだ。

ウエアの種族か。

ファードイナンスはふと思った。

魔属には半分程魔属の血が混ざったウエア族と生粋の魔属の血の者がいる。

生粋の魔属は人間の姿をしていないのがほとんどだ。

まあ人間の姿も出来るのだが……。色々あるのだ。そして敵の兵達は人間の姿をしている。反王派の魔属の軍服を着ている以上ウエア族ということしかない。その時、突如ファードイナンスの背後から叫び声が響いた。倒れていく兵士が二人。そして剣を持った兵士が二人いた。残ったのはファードイナンスと赤ん坊、従者の三人。第一この隠し通路は王族近衛兵しか知らないはずなのだ。それなのに待ち伏せされていた……。裏切り者がいたということだ。それに女王の近衛兵に裏切り者がいるという事はかなり前からこの襲撃が計画されていたことを意味している。

「残念だったな。これ以上は逃げられない。まあ私達が用あるのはその赤ん坊だが」

その時リーダーらしき魔属の男が言った。（あれは反王派の將軍、かなりの使い手らしいけど……）流石のファードイナンスにも焦りの色が浮かんだ。

「この子は誰にも渡しません！ 命にかえても守ります。クレアこの子連れて逃げて……そして静かに暮らして」

「ですが……」

「これは命令よ！」

「おい、この私がそうあつさりと逃がしてやるとでも思ってるのか？」

二人の会話を聞いていた男はそう冷たく言いはなった。だがファデーナンスもそんなことは承知している。

「何か忘れて無いかしら？ 私はこの世界屈指の転移魔法の使い手なのよ？」

ファデーナンスは不適な笑みを浮かべて言った。

「お前達赤ん坊を早く確保しろ！」

その事を忘れていたためリーダーらしき男は焦り叫んだ。

この声に男の手下達は一斉に襲いかかる。だが時既に遅しファデーナンスの呪文は完成していた。

「二人を遙か異国の地へ運びたまえ……」

「女王様！」

クレアという名の従者の叫びにファデーナンスは笑顔で答えた。消えていくクレアと赤ん坊の姿。これで赤ん坊は無事だろう。だがファデーナンスの心は子供の将来を思い苦しかった。

「……女王を確保だ。捕虜として連れていく」

男は静かにそう言った。内心男はかなり悔しい思いをしていただろう。ファデーナンスはふと思った。

魔属の者達に捕えられる間ファデーナンスは抵抗はせずただ空を見上げていた。

「結局魔王であるあの人は来なかった……」

ファデーナンスは一人つぶやく。

そして何事もなかったかのように空には満天の星が輝いていた。

ブログ（後書き）

全くの初心者なのでアドバイスとか頂けたらうれしいかぎりです。
よろしく願いします！

第1話

ドンドンドン

「……おい、中にいる奴！」

バルガ大森林に囲まれた都市、王都ブリスゴア。その城門前。

そこで門番をしていた若者は月明かりの中、立ったままウトウトとしていた。時間は真夜中。ほとんどの人間が眠っているであろう時間だ。

「起きろ人間！」

「ん……」

門番の若者は襲ってくる眠気のなか、自分が門の外側、つまり城門の脇にある小さな扉の反対側から声をかけられているのにやっと気が付いた。

「……はい、なんでしょうか……？」

門番は寝惚けながらその声に答えた。

「やっと起きたか……門番が眠るとは……まあいい……で、人間、市街に入りたいんだが」

「あ、はいどうぞ……」

そう言いながら若者はわきの扉を寝惚けていたが開けた。普段大きい方の門は馬車などの交通などに主に用いられている。

「ああ、すまないな」

外にいたのはすらっとした感じの美人の女性だった。歳は見た目18歳位に見える。

髪は長く、顔立ちはとても整っていた。切長の目は一見鋭い印象を与えるが瞳の奥には何か別のものがみてとれる。そして女性は異国風の薄い生地で赤の目立つ優雅な服装をしていた。

若者は女性の姿を見て寝惚けていたが凄く美人だなあと思って頬を赤く染めてしまった。

「それではな」

そう言つて女性は若者のそばを通り過ぎ街の中へ消えていつてしまった。若者はただただ女性の後ろ姿にみとれてしまつていた。彼女が若者の事を人間と言つたのにも寝惚けていたため気付きもしなかつた。

若者が女性を市街に入れた日の午後。

若者は門番の勤務時間が終了し門番の革鎧姿のまま街の食堂で遅い昼食をとつていた。食堂は王都ブリスゴアいちの大通に面した所にある。だが時間にしてはかなりすいていた。しかし街は人で溢れかえりとても賑やかでいる。その食堂がただ料理がまずいため人氣が無いだけなのだ。まあ値段が安いというのがある。

「ここ、いいかな？」

若者はその時突然声をかけられた。

「あ、はいどうぞ」

若者はそう言いながら声をかけてきた人物を見た。そして驚いた。声をかけてきたのは真夜中に市街に入れた女性だったからだ。若者の正面に座つた彼女は近付いてきたウェ이터にコーヒーを注文し若者に話しかけた。

「先刻は世話になつたな」

「いいえ、別にそんな……」

しばらくお互い沈黙が流れたあと彼女は突然話をきりだしてきた。「まあここで会つたのもなにかの縁だろう。これから暇なら街を案内してくれないか？」

「え、うん……」

若者はあまりにも突然だったので実際迷つた。

「もちろん嫌なら結構だが……」

しかしそういわれては若者は断わるわけにはいかなかった。断わるということは彼女を案内するのが嫌だととられてもおかしくないからだ。

みずしらずの女性を案内するのは気がひけたが彼女が美人だったので、まあいいかとも若者は思ってしまった。

「……はい。いいですが、どの辺を案内すれば？」

「いやただ街全体を適当に案内してくればいい。別に要望はない」
そして彼女はそういつてから席を立ち、

「では行こうか」

そう言った。若者も急いで注文した物を口に詰め込み席を立つ。

「せっかちな人だなあ」

若者はそう小声でつぶやくと、

「ん、なにかいったか？」

すぐに言葉が帰ってきた。

「い、いいえ！」

若者は心の中で一人彼女は地獄耳かなと毒づいたのだった。

第1話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。これからダラダラと進んでいく予定です、よろしく願います。

第2話

「ここがこの街一番の有名なラクソン大聖堂です」

「ほおー」

「これほどのものが数百年前からあるそうなんですよ」

「ほおー」

若者は細かく説明するのだがこのように女性はきのない返事を返すだけ。

若者は彼女を色々なところに案内してきたが彼女はほとんどのものに興味を示さず、また興味を示したとしてもまたすぐに興味を無くすのだ。

通りかかった街の広場では傭兵らしき人達が噂話をしていた。

「なあ、お前知ってるか？ 最近魔属の国では王権争いが激しくて、人間、魔属と種族を問わずに兵士として雇っているらしいぞ。お前行ってみるよ！」

一人が冗談半分に言う。

「おいおい勘弁しろよ。魔属にどんな目に会わされるか分かったもんじゃない」

もう一人が答えた。

女性はそういう傭兵達の話に耳を傾けていようだ。

「この地までそんな噂が……」

その後、魔属間の争いの噂話を耳にしてから彼女はなにか別の事を考えているみたいだった。ちなみにこの国では魔属は狂暴で残忍と恐れられている。

「次行きますか？」

若者は問いかけた。

「ん、ああ、頼む」

女性は答えた。

若者は反応の薄い女性に困りはてていたが次の場所に案内することにした。

歩いている途中若者は女性の名前も知らない事を思いだし彼女に声をかけてみることにした。

後ろからついてくる女性の方を振り返り声をかける。

「あの……すみません」

「ん、なんだ？」

「今さらですが、貴方の名前を聞いていなかったの……」

「ああそういえばそうだな。私はルネスという名だ。まあそのままルネスと呼んでくれ」

彼女はそう言うと言った若者の名前を聞いた。

「僕はデイルスといいます。皆はデイルと呼んでいます」

「そうか、いい名を親につけられたな。デイルスという名は私の国の意味では希望というのだ」

二人は再び歩き出す。

「はい……僕もそう思います。実は僕は先程のラクソン大聖堂の前に捨てられてた所を今の親に拾われて育てられたんです。この名は僕が発見された時に一緒にあった手紙に書いてあったそうです……」

デイルはそううつ向きながら言った。ルネスの目が輝いた。

「お前捨てられていたと親に言われたのか？」

「はい」

それを聞いてルネスの表情が少し変わった。デイルになにかしらの興味をもったようだ。

「お前なにか変異が体に起きたことないか？ 突然怪力になった事があるとか」

「いいえ、無いですが……なにか僕が捨てられていた事に関係あるんですか？」

「いや、なにも無いのならいいんだ」

そういつて彼女はまた考え込んでしまった。

こうしている間にも二人は次の観光地についてしまった。

「ここが遙か昔、魔属の城があったといわれている遺跡です」

デイルは気をとりなおしてルネスに言った。遺跡は現在は廃れて立ち入り禁止になっているが発見された当時は観光名所として多く人でにぎわっていた。遺跡自体はかなり古くからあるらしくまだ探索されていない所もあるようだ。

「ほう、ここが。初めて来たな。ん？ 現在立ち入り禁止となっているではないか？」

「今回は特別僕がいるからいいんですよ」

デイルは笑って言う。

「そうか。貸し切りということか。では行こうか」

ルネスは貸し切りという事に惹かれた様だ。

しばらく外を見回した後、二人は遺跡の中に入った。

その時である。

「ダレカタスケテ！」

遺跡の中から何かが助けを呼ぶ声が聞こえてきた。

「誰かが助けを呼んでる！」

デイルは門番をやっている正義感からか、そういつて走り出した。デイルが走り出すと突如壁だった所に道が出来た。

「こっちか！」

突如出来た道の方へデイルは走る。

「おい、待て！ 何があるか分からんぞ！」

「誰か助けを呼んでるじゃないか！ 放っておくことは出来ないよ！」

デイルは一瞬立ち止まるとそう言い再び走り出した。

「まったく、お人好しが！」

そう言うつとルネスもデイルを追って走り出した。

第2話（後書き）

そろそろ戦闘シーンを書いてみようかなと……。物語はまだまだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7416a/>

ドラゴンキングダム・クロニクルズ

2011年1月9日05時12分発行